

特集 揺れる学校から仕事へ
——働くことをどう教えるか

実践報告と提言；働くことをどう教えるか

自立することに誇りを持つこと

——職業訓練の場合——

田中 萬年

職業訓練は働くことを目的としている。1962(昭和37)年に通達された「職業訓練指導員業務指針」では、学科・実習の「指導」があったが、「働くことをどう教えるか」という問は重視されなかったといえる。

筆者は職業訓練指導員を養成する職業能力開発総合大学校に長年勤めてきた(3月に退職)が、学生に職業訓練を担当する立場になった時の注意点として、ただ技術・技能を指導するだけではなく、指導員のあり方、受講生への接し方についても説いてきた。以下は私見としての「労働観」形成の構想である。

本特集が目的とする学校卒業者を対象とした職業訓練は、他の在職者訓練、失業者・離職者訓練に比べてやはり注意すべき事は多い。それは、若者が社会の厳しさ、労働の厳しさを実感していないだけでなく、そのことを考える機会が少ないことによる。さらに、在学中に職業訓練を知った時に、職業訓練を卑下、あるいは差別する気持が芽生えることがあり、そのような自分が職業訓練を受講することに自尊心を喪失してしまう者もいるからである。成人受講者は職業能力の重要性を認識していて、若者のような心理は少ないので技術・技能中心でもよいのである。

指導員は技術・技能について基礎的な手作業から、近年の先端的なIT技術までを常に学習する生涯学習者でなければならないが、本稿の課題の為には以下が特に重要である。

核心は受講生が主体的に学ぶこと、技術・

技能を主体的に習得するようにならなければならないことである。このことは、孟子が二千年前に言った「親方は弟子にコンパスや定規の使い方を教えることはできるが、腕前を上達させることはできない」との教えを考えさせ、訓練生自身が積極的にチャレンジするような意識になって貰うことである。それは“Calling”を目指す意味だとしている。

そのためには、受講生の興味・関心を引き出す教材を開発すること、つまり、受講生自身が自ら学ぼうとする意欲を持つような方向付けが必要となる。その基本は教育心理学でも重視されている実物教授であり、具体から抽象へであり、即時反応の原則の応用であるが、これらは職業訓練の場合、実習を活用すれば良く、有利に展開できる。

指導員のための参考書としてまとめた『職業訓練原理』(職業訓練教材研究会、2006年3月)において、第1章の「職業訓練指導員の役割」を、①職業訓練指導員の業務と拡大、②自信と誇りを与える指導員、③親方としての指導員、④「専門職」としての指導員、⑤職業訓練を説明できる指導員、⑥指導員論を考える指導員、⑦「職業訓練学」を追求する指導員とした。本稿に関連して特に重要と考えるのは②と⑤であるが、これらは後に詳述することとする。そして、訓練生からの信頼を得て、指導が空回りしないためには③の訓練生への愛がなければならないこと、また⑥の指導員自身が職業訓練に確信を持っていな

ければならないことを説いている。

若者の職業訓練は今日では高卒者を対象にした基準として「普通課程」がある（中卒者の基準はなく、これと一緒に訓練する）が、その他に職業能力開発大学校、職業能力開発短期大学校における二年制の「専門課程」がある（大学校は二年制の「応用課程」が続く）。雇用・能力開発機構傘下の「専門課程」の講義科目として「職業社会学」と「キャリア形成論」が設定されているが、これらの科目のテキストとして依頼されて執筆したのが『仕事を学ぶ——自己を確立するために——』（実践教育訓練研究協会、2004年3月）である。本書は専門課程の学生だけでなく「普通課程」の受講生にも応用できると考えている。この執筆方針として筆者が注意したことは副題にも著したが、受講生が「自己を確立すること」だと考えた。受講生一人ひとりが自分の人生を切り開く観点に立って職業訓練を受講することが最も重要なことと考えた。このためには、①受講生が職業訓練によって技術・技能を習得していることに「誇りを持つ」ことであり、②社会に出ても、職業訓練を受けたことに誇りを持てねばならない。

そのためには、第一に技能労働者、テクニシヤンの意味と社会的意義を理解すること、第二にその役割である「仕事を学ぶ」意味を理解すること、そして第三に社会の諸制度に付いての実情と動向を理解することが大事と考え、この三部で同書を構成している。

まず、受講生が職業訓練の受講に誇りを持つためには、職業訓練の意義を正しく認識しなければならない。国際的には職業訓練が労働の予備訓練であり、学校制度と密接な関係があるが、わが国では学歴社会になり両者が分離されているので、学歴にカウントされない職業訓練受講生の場合特に重要である。そのためには、職業訓練こそが学習の原点であり、本質を探究しているのだということを確信して貰うことが必要である。

職業訓練が本質だ、という意味は職業訓練こそが人材開発の具体的な形態であるということである。この理解のために、学校制度の日本の歴史と欧米の動向を紹介している。

次に、当然、社会に出て働くことに誇りを持つてねばならない。仕事とは何か、職業とは何か、働くこととはどのような意味があるかを理解し、自分の労働が社会にとって重要な役割があることを理解してもらう。

そのためには仕事の中核でもある、学ぶ技術・技能の意義を認識しなければならない。これは特に近代化思想の悪弊として先端的技術に関心が向く傾向があるからである。

ところで、職業訓練の受講生が全て悲観的な心証で入校しているわけではない。最近インタビューした訓練生は欧米の訓練生のようであり、明るく、筆者も元気を貰えた（『技術・技能受訓訓練生の実情と職業観』、『Consultant』、2007年5月号）。彼らがクラス討論を行い送ってくれた感想文の中に「私たちは大学へ進学した人たちとは違い、早い段階で目標を見つけました。既に、高校や中学で見つけた人もいます。中には遅く大学・高専に行ってから見つけた人たちもいます。その目標を達成するための一番の近道としてこの専門校に入りました。」とあった。残念ながらこのような訓練生は多くない。本特集の意図が重要な所以である。

職業訓練の意義を受講生だけでなく、広く学校関係者、一般社会に理解して頂かねばならない。そして、若者達に職業訓練を紹介して貰いたいと願っている。そのための良書としてようやく、職業訓練を一つの進路に位置づけ、その意義を解説し、受講者の声を紹介している指導書である『フツーを生きぬく進路術 17歳編』（中西新太郎監、青木書店、2005年4月）が刊行された。働くことの指導のためにも本書も併せてご利用頂きたいと思う。また近刊の拙著『働くための学習』（学文社）もご批判頂ければ幸いである。